

竹富町調査に関する報告書

鳩間島の廃村と学校存続について

教育学部社会科 与那嶺 匠

1. 鳩間島の調査に関して

主要調査項目

- ・鳩間島住民は如何にして過疎対策に取り組み、廃村をふせごうとしているのか。
- ・鳩間島と鳩間小中学校の関わりはどのようなものか。

下位調査項目（発生疑問）

- ・鳩間島の人口推移と、就学児童とその他の人口比率はどう変化しているのか。
- ・何故、鳩間島の人口は減少していったのか。
- ・鳩間島の過疎に対して、行政と島民はどのような対応をしたのか。
- ・鳩間小中学校は過疎化に対して、どのような影響をもっているのか。
- ・鳩間島における鳩間小中学校と里子はどのような存在であるのか。
- ・鳩間小中学校の存続のために、鳩間島住民はどのような行動をしているのか。

2. 参考文献並びに参考資料

森口裕 『子乞い 沖縄 孤島の歳月』 凱風社、2000年

羽根田治 『パイヌカジ 沖縄鳩間島から 南風』 山と溪谷社、1997年

鳩間小学校創立百周年記念誌編集委員会編 『波濤を越えて【竹富町立鳩間小学校】創立百周年記念誌』 竹富町立鳩間小学校、1997年

藤後野里子 『子供と向き合う 5 止 島へ里子、成長した息子 離れてみて「わかった」』 毎日新聞社 朝刊、2001年 4月15日 Mainichi

INTERACTIVE (URL :

[http://www . Mainichi.co.jp/eye/feature/details/haha/kiji/21.html](http://www.Mainichi.co.jp/eye/feature/details/haha/kiji/21.html))

沖縄タイムス『島を往く・船人くらし(6 鳩間島 未来を託す学校「子は宝」
生活支える郵便船』沖縄タイムス社 朝刊 1999年 12月4日 沖縄タ
イムス社ホームページ(URL:
<http://www.okinawatimes.co.jp/spe/yuku991204.html>)

竹富町役場ホームページ(URL:<http://www.town.taketomi.okinawa.jp/>)

沖縄県教育委員会ホームページ(URL:<http://www-edu.pref.okinawa.jp/>)

沖縄県庁ホームページ(URL:<http://www.pref.okinawa.jp/index-j.html>)

3. 調査報告結果

(1) 鳩間島の概要

鳩間島は面積0.96平方キロメートルの小さい島で、西表島の北に位置する。人口は概ね50人前後で、島民は主に漁業で生計を立てている。これと言った産業はなく、観光客も年間200人程度と竹富町のほかの島々と比べても極端に少ない。公的機関は鳩間小中学校のみで、郵便局も業務委託の簡易郵便局しかなく、行政的には切り離されている感のある島である。

(2) 鳩間島の人口の推移

鳩間島は2度の人口増加と人口減少をしている。最初の人口増加は1702年の黒島からの島分け以後から1771年までである。最盛期には500人以上に膨れ上がっている。しかし、1771年に大津波と飢饉が起こり、人口は減少に転じる。1873年には伝染病が流行し人口は100人程度まで減少するが、その後は増加に転じる。第2の増加期である。人口増加は戦後の1949年まで続き、650人程まで増加する。その後は減少に転じ、1965年までには人口1(氾人程度と急激に減少していく。その後は緩やかにだが人口は減少を続け、50人前後で人口は増減を繰り返すようになる。

戦後の人口減少にはさまざまな要因がある。まずは戦争の影響と、大型台風や

大地震などの自然現象である。この地域は台風の通過点であり、風速 60 メートルをこえる大型の台風に度々見舞われている。また度々起こった干ばつも影響を与えた。八重山地方は井戸と雨水に水源を頼っているが、井戸水は塩分が強いため炊事などには適さず、そのため主に雨水を使用していた。よって干ばつの度に人々は苦しめられていた。さらに日本本土が高度経済成長時代を迎えたため、若い働き手が次々と本土へ流出した。沖縄の日本復帰の時には、これで生活が楽になると考えた住民が一向に良くならない生活環境に嫌気をさし、島を後にした。これらは鳩間島に限らず、竹富町全体に共通する。

これ以外に、鳩間島は鰹節の産地であったが、1960 年代から急に鰹が取れなくなり、多くの漁業関係者が失業したことも人口減少の要因になっている。

鰹が取れなくなった理由としては、海流の変化や、漁業用の撒き餌が進歩したために、鰹がよその場所に流れてしまい、鳩間島近海に寄り付かなくなったという意見があった。

「カツオ漁で栄えた戦後間もないころは七百人近くまで人口が膨らんだこともあった。しかし、約半世紀にわたって島の生活を支えた産業も六八年のカツオ節工場の閉鎖を機に影をひそめ、人口流出に拍車をかけた」 沖縄タイムス、島を往く・鳩間島より抜粋)

一度鳩間島を後にした島民たちは、いくらインフラが整備されても、生活に必要な収入が得られず、交通などその他の面でも不便な鳩間島に戻ろうとはしない。そのために、鳩間島は極度の高齢化が進み、人口の減少、島の衰退に向かって突き進んでいる。

国勢調査によると人口は、1970 年には 27 世帯 69 人、1975 年には 18 世帯 33 人、1980 年には 21 世帯 36 人、1985 年には 41 世帯 70 人、1990 年には 27 世帯 54 人、1995 年には 28 世帯 45 人、2000 年には 28 世帯 54 人となっている。

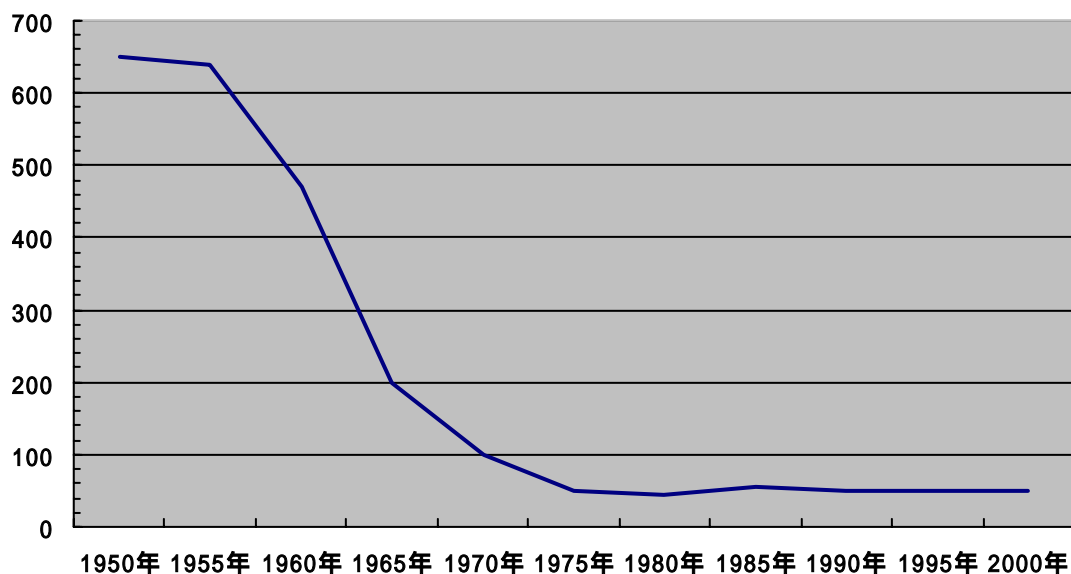
この結果を見ると 1985 年には人口が前回調査の倍近くまで増加している。これは 1982 年からはじまった、里親制度により鳩間島外から子どもを呼び寄せるという試みのためである。このため島外から子どもたちが島に訪れ、鳩間小学校は生徒数増加、1974 年に廃校になっていた鳩間中学校も再開校され、そのため教師が島に移り住んだ。

しかし、子どもたちは学校を卒業すると島を出て行ってしまふ。また教師も、鳩間島での任期が終わってしまえば他所へ行ってしまふ。そのため、実際の鳩間島の人口はこれらを差し引いて考える必要がある。

ちなみに学校の生徒と教師の数は 1980 年には生徒 1 人の教師 2 人に対して、1986 年には生徒 15 人の教師 12 人になっている。1990 年は生徒 18 人の教師 10 人、1995 年は生徒 7 人の教師 9 人、2000 年は生徒 14 人の教師 10 人、そして 2002 年は生徒 6 人の教師 10 人である。さまざまな試みの結果、今現在は人口の

減少に歯止めがかかっているように見えるが、長い目で見れば確実に鳩間島の人口は減少し、島は衰退に向かっていると見え、早急に人口減少に対する歯止めの施策と島の復興に伴う人口増加策を講じなければ、確実に廃村になると考えられる。

図 鳩間島の人口の移り変わり（鳩間郷友会調べ）



（3）過疎化に対する行政の対応と、島民の反応

過疎化に対する行政の対応は1972年の沖縄の日本復帰により活発化する。まずは1973年、県立八重山病院の鳩間診療所が閉鎖される。これにより鳩間島は医者はいない島となり、急患が出た場合は海上保安庁にヘリコプターを出動してもらい、石垣島の病院へ搬送することとなった。

次に1981年、鳩間島郵便局が郵政省の合理化政策のため廃局となる。その後、鳩間島の住民によって委託業務局である鳩間簡易郵便局が設立された。

1974年、鳩間中学校が生徒がいなくなった為に廃校となる。その後、島民の里子受け入れの努力の結果、1984年に再開校する。

竹富町は学校や公民館の建て替えや診療所の開設、道路の舗装などの陳情に対して「人口が100人はいないと出来ない」（子乞い 沖縄 孤島の歳月より抜粋）という姿勢を示し続けた。これは人口が100人以下のため、国の補助基準にあてはまらず、国から補助金が出ないからである。

鳩間島は水資源に乏しく度々水不足に陥ったが、上記の理由によりなかなか海

底送水管が敷設されなかった。しかし 1978 年、鳩間島へ沖縄開発庁の佐藤信二政務次官が視察に訪れ、海底送水の早期実現を確約した。これにより 1979 年海底送水工事が始まり、翌年の 1980 年 7 月に西表島西部のマーレー川から水が送水管によって運ばれるようになった。1983 年には海底送電ケーブルが敷設されて、自家発電機で電気をおこさなくてもよくなった。

「過疎の要因に挙げられてきた水と電気は、1980 年と 83 年にそれぞれ海底送水、送電が完成し、安定供給が実現した。島のコミュニティーセンター前には鳩間島水道記念の碑が設置され、碑文には当時、沖縄開発庁長官だった小淵恵三首相の名が刻まれている」(沖縄タイムス、島を往く・鳩間島より抜粋)

島民は生活インフラの整備に関してはおおむね満足しているようである。特に水道が完備されてからは水不足に悩むことはなくなったそうである。

また 1988 年ごろから公共工事が盛んになり、公民館が新築され、道路が舗装された。桟橋は拡張され、定期船が横付けできる埠頭もできた。防波堤も出来たため、海が荒れた日でも船舶の出入港が楽になった。集落には防火用の水槽も設置された。

島民への島開発に対する聞き取り調査によると、必要最小限の事前開発はやむを得ないと考えているようである。特に桟橋と防波堤ができたことにより、船の入港が容易になったことで波に関係なく大型船が入港できるようになり、冬場によく起こった海の時化による島の長期孤立化がなくなったそうである。

大切なことは自然を一方的に守るのではなく、自然と人間の生活の折り合いをつけて両立させながら、共存共栄していくことである。

診療所はいまだに開設されないままであるが、島民は診療所の開設に対しては現実的に無理ではないかと考えており、それならばより現実性のある竹富町役場鳩間島出張所の開設を役場に対して陳情していくそうである。

郵便局機能に関しては、現時点では特に問題点はなく、簡易郵便局ながらも上手く機能しているようであるが、郵政事業民営化によって簡易郵便局も閉局になるのではないかという危惧の声もあった。

交通手段は現在、石垣島から鳩間島への直行便は週 3 便就航している。それ以外にも一日一本の郵便船で鳩間島へ渡ることができるが、共に日帰りすることは難しく、またチャーター船は片道 5000 円と高額なため、それが観光客が増えない原因の 1 つとなっている。実際、日中は西表島で観光し、夜は鳩間島で宿泊したいという観光客も多いそうだが、船の少なさと料金の高額さのために実現には至っていないそうである。

これに対処するため、現在フェリーを一隻建造中であり、完成後には一日一便は石垣島・鳩間島間を就航させる予定である。また、町営の宿舎を鳩間島に建設する計画もあり、より観光客が鳩間島に来やすく、滞在しやすいようにする予定

である。

ほかにも行政主導により、鳩間島の産業と収入基盤の確立のために、シヤコ貝の養殖が試みられている。また、棧橋の更なる整備により、鳩間島をダイビングボートの中継基地として機能させようとしている。

行政の対応は基本的には後手に回り、島民の要望に上手く答えられていない面がある。また今現在をもってしても根本的な過疎化対策は打ち出されずにいる。これは竹富町役場が石垣市にあるため、役場職員も石垣市民であり、鳩間島を含め竹富町の現状認識に欠ける部分が多々あることも理由の一つとして挙げられる。

(4) 過疎化に対する鳩間島島民の対応

鳩間島の現状は大変厳しく、島民並びに鳩間郷友会はその現状を正確に認識しており、それに対する対策が鳩間島内で常に論議されている。

鳩間島の生活はほとんど自給自足で営まれている。しかし、島外からものを得る場合は現金が必要である。鳩間島で現金収入が得られれば、生活基盤を整えられ、人が住みやすい環境になるはずである。

1981年、鳩間島の青年たちによって「鳩間島振興開発計画」が立てられ、鳩間島農業生産組合が結成された。これは鳩間島で農業を行い、出来た作物を出荷することで現金収入を得ようというものである。地主から土地を借用し、そこで大々的なかぼちや生産を始めた。これは一人当たり年間30万円程度の利益ができたようであるが、その後いざこざにより生産組合は解体されて、現在は存在しない。

また1982年、生徒不足により廃校になりかけた鳩間小学校を存続させるために鳩間島外から親戚の子どもを呼び寄せ、鳩間小学校を存続させ続けた。さらに1984年に沖縄愛隣園の鳩間分園ができ、鳩間島島民は里親制度を利用して施設の子どもたちを受け入れた。これにより1984年には鳩間中学校が再開校した。里親制度がマスコミに注目されて、その様子がテレビや雑誌等により紹介されたことで、観光振興に一役買っている。

更に今ではバリケンというアヒルとフランスガモを交配させてつくったハトマオオガモや、ヤシガニを飼育して増殖させて出荷するというも行われている。ハトマオオガモは肉質が大変良く、売れ行きも好調なため、今後も活発的に生産に力を入れていく方向である。

「ゴマを島の特産品にしようと、ゴマ栽培に取り組んでいる。きっかけは一昨年。島を訪れたゴマ栽培の専門家が鳩間の土地はゴマの栽培に最適と太鼓判を押した。無農薬で育てられる土地は全国でもめったにない、という。勧められるま

まに約六千六百平方メートルの畑にゴマを植え、今年夏、大手流通会社を通じて関東地方に試験的に二百キロを出荷したところ、独特の風味が好評を集めた。手ごたえを感じた加治工勇さんは、ほかの島民にも栽培を呼び掛け、来年は一トンの出荷を目指したいと意気込む。夏場は三、四カ月で収穫できる。現在、冬場の栽培も可能かどうか試行中だ」(沖縄タイムス、島を往く・鳩間島より抜粋)

ゴマは年間に1トン程度が生産され、関東圏を中心に出荷されている。鳩間島のゴマは品質的に評判が良く、高級なゴマとしてのブランドイメージが確立されつつあるが、今現在はゴマの芽がヤギに食べられてしまうため、その対策が終了するまで、生産は一時中止している。いずれは島を挙げて鳩間島を無農薬ゴマの一大生産拠点とする計画である。

鳩間音楽祭という企画も実施されている。これは鳩間島が音楽の盛んな島という特徴を生かし、ゴールデンウィーク中に音楽祭を開催して観光客を集客しようというものである。今年は口コミだけで音楽祭目当ての観光客を600人も集客している。現在は宿泊施設の問題で、一度に大量の観光客を島に招くことができないが、今後宿泊施設が整備されれば、さらに多くの観光客を集客できる可能性がある。

実際に来島した観光客への対策として、観光客向けに売店を機能させたり、Tシャツや鳩間島の音楽のCD、採取済みの星砂の販売などの土産品の販売、鳩間島のガイド活動など、観光客がよりよく鳩間島で滞在できるように取り組もうとしている。

島外から子どもを呼び寄せる、島で現金収入が得られる産業を育成して生活基盤を整える、観光客を集め大切にする、というのが鳩間島住民が取っている過疎化に対する反応である。しかしこれらは、どれも模索段階にしか過ぎず、里親制度の利用による学校存続活動においては根本的な過疎の解決方法とは言いにくい。いかにして人の住みやすい島にするかが鳩間島の課題である。

(5) 過疎化に対する鳩間小中学校の影響

1995年の鳩間島の人口構成であるが、就学児童が10人、20代が4人、30代が2人、40代が10人、50代が3人、60代以上が16人となっている。60代以上の高齢者の人口比率が36%であるが、実際は就学児童と若い教員達は期間限定の住民であるため、それを差し引いて考えるとその比率は実に50%を超える。したが、現在はそのほとんどが登校拒否児や引きこもりなどの子供たちが里子の主体を占める。そのため、以前は里親としての調査、認定を行政から受けなければならなかったが、現在はあくまで個人間の契約により「一時預かり」という形

をとっているのです、特に里親認定は必要としていない。「里親制度」という言葉は現状とは食い違っているため、現在は「留学制度」と呼んでいる。

里子たちは施設やカウンセラーの紹介、自分でテレビなどで鳩間島のことを知って志願してくるなど、さまざまな方法で鳩間島に里子としてやってくる。

里子たちは鳩間島に来てそれぞれに違った反応をする。鳩間島ののどかな自然と人間関係に触れて心を癒して引きこもりを解消していく子供もいれば、鳩間島の都会とはかけ離れた時間の流れと生活世界に戸惑い、この島にいたらダメになると悟って島を出るために必死に勉強して登校拒否を解消していく子供もいる。この両者は両極端の反応であるが、結果としては共に社会の一員として自立するという結果に行き着いている。

里親をしている人の話によると、里子を受け入れ始めたころは、里子のことについて島民全体で話し合っていたが、現在は里親と里子の間で解決していったりしているそうである。学習環境に関しては、確かに塾などの都会的なものが存在しないために勉学面では都会には劣るかもしれないが、そもそも子供たちは勉学を目的として来ているのではなく、人格形成のために鳩間島に来ているので、自然と人間があれば環境的には特に問題はないという。

里子たちは鳩間小中学校を卒業すると当然鳩間島を出て行くわけであるが、彼らは鳩間島を「第2の故郷」と呼び、豊年祭などの島の行事の時には鳩間島に帰ってきて、実際に島民の一人として行事に参加したりしている。鳩間島の行事自体も島民の減少と高齢化のために、帰ってくる里子達の参加なくしては成り立たなくなっている面もある。里子たちは鳩間小中学校の存続以外にも、島の文化や生活を支えるという役割も担ってくれているのである。

なお、以前里子の一人が鳩間島に住み着いて生活をしてきたが、鳩間島では現金収入が得られなかったために生活が成り立たず、結局鳩間島を出て行ってしまったそうである。やはり鳩間島を若者が定住できる島にするためには、島内で現金収入が得られる仕組みを作る必要がある。

(6) 鳩間小中学校存続、そして鳩間島発展のために

1974年に鳩間中学校が廃校となり、1982年に鳩間小学校も廃校の危機に瀕した。当時ただ1人だけの鳩間小学校の生徒が西表島へ移住することになり、生徒が1人もいなくなる事態が訪れたからである。

この時鳩間島の住民は親戚のつてを頼り、2人の子どもを鳩間小学校に入学させ、鳩間島住民のそのほとんどは高齢者と、もう決して若くない中年層の人たちである。新たに子どもを作れる若者は居らず、島は衰退の道を辿っている。しかし

そんな中でも鳩間島の住民たちは希望をなくしていない。いつか若い夫婦が島に住むよう、日々取り組んでいる。島に若い夫婦がいれば、彼らが子どもを作り島は続いてゆく。

そのために必要不可欠なのが学校の存在である。島に学校がなければ子どもを抱えた家族は、その子の就学のために島を出て行ってしまふ。これでは島には若い人間が住めなくなり、住民はひたすら高齢化し、いずれ島は滅びてしまふ。鳩間島住民にとってこれは1番避けなければいけない事なのである。それ故に里親制度を利用して、鳩間小中学校存続のため島外から子どもたちを呼び入れているのである。

(6) 島における鳩間小中学校の存在

鳩間小中学校には過疎をこれ以上侵攻させないという役割のほかに、鳩間島唯一の公的機関という役割もある。沖縄の日本復帰後、鳩間島から診療所や郵便局などの公的機関が次々と姿を消した。日本政府が進めた合理化のためにである。現在ある郵便局は簡易郵便局で、鳩間島島民によって運営されている委託郵便局である。

それゆえ島の人々は、鳩間島は行政に見捨てられて島だと感じている。

そんな島民が唯一、鳩間島が行政と繋がっていると感じているのが鳩間小中学校なのである。鳩間小中学校は島の中心的な役割をしており、島は鳩間小中学校の学校運営に合わせて動いている部分も大分ある。

また、鳩間島の未来を繋ぐ大切な存在でもあり、小中学校の保持に関して島民は大変な意識と労力を割いている。

鳩間小中学校の校長によると、運動会並びに学芸会などの学校行事は島中あげて行われ、島民も積極的に参加するという。また普段の授業でも島民が協力してサポートしていくという計画もあるそうである。

いかにして鳩間小中学校を存続させていくかが、鳩間島の自治における重要な議題の1つとなっている。

(7) 里子の様子

現在、鳩間小中学校の生徒はほとんどが鳩間島外から来た里子たちである。以前は島民の親族を呼び寄せたり、施設の子供たちを引き取るという形の里子であった。その後1984年に沖縄愛隣園の鳩間島分園を作り、里親制度を利用して、

施設の子どもたちを受け入れた。

里親制度とは「都道府県に里親登録した人が、親の病気や経済的な理由で親元で過ごせない子どもを児童養護施設から引き取り、一定期間預かる仕組み」(里親会情報誌ぶりぶしより抜粋)である。

現在では不登校や引きこもり等の、一般の学校に馴染めない子どもたちがカウンセラーやフリースクールに鳩間島の里親制度のことを知らされ、鳩間島に移り、鳩間小中学校に通うケースも多い。

「釣糸を垂れる子供たちにどうしてここに来たの?と尋ねた。まあ、不登校ですね。真っ先に答えたのが聡史君=仮名=(15)だった」「小学校6年生のころから、友人とのトラブルが原因で学校を休みがちになった。中学に入ると行かない日がどんどん増えていった。行きたいけど行きたくない」「最後にかけてのが、横浜のフリースクールで紹介された島だった。ぼく、行ってみる。初めて自分から言い出したことだった。昨年春、聡史君はボストンバッグを抱え島に渡った」「いじめや不登校が理由で島に渡った子供たちが四つの家庭の里子になり、新たな生活を見いだしていた。聡史君も、民宿を営む70代の男性が父親代わりとなり、那覇市の一つ年下の男の子と3人で、木造平屋建ての赤瓦の家で生活を始めた」(毎日新聞、母・子供と向き合うより抜粋)

里子達のおかげで鳩間島はギリギリのラインでとどまり続けることができている。里子達の島に与える影響は非常に大きい。またそれと同時に、鳩間島が里子達に与える人格形成への影響も大きい。鳩間島と島民と里子がお互い支えあい、一つとなって生活空間を守り続けることができているのである。

しかし、これらの活動も小手先の方法にしか過ぎず、過疎化に対する根本的な解決にはならない。子ども達は学校を卒業すると、島を出て行ってしまうからだ。島民も高齢化のため、いつまでも里親を続けることはできない。やはり子どもを産み、育てられる若者が島に住んでくれる様にしなければならない。まだ里親として里子を受け入れられる島民がいるうちに具体的な対策を講じる必要性があり、それを島民も重々承知している。しかし時代の状況、鳩間島の急速な高齢化と過疎化が対策を講じることができる環境を与えてはくれない。

鳩間島は何とも言いがたい状況に置かれながら、それから脱するために模索をしている途中である。それが実を結んで未来へと鳩間島を繋げていくのか、はたまた廃村となって鳩間島は忘れ去られていくのかはわからない。しかし行政や鳩間島以外に住む人々は、鳩間島島民のそんな想いを踏みにじってはいけない。同じ仲間として支えあい、共に未来へと道を築いていかなければならないのである。決して他人事ではないのだ。